

娯楽と科学のはざまにて

——19世紀メナジェリー再考

櫻井文子*

はじめに

ヨーロッパ各地の見世物市をまわって営業する移動動物園を画家パウル・マイヤーハイムが描いた作品、「メナジェリー」（1864年作成、図は新聞掲載のイラスト）を紹介する『ライプチヒ絵入り新聞』の記事は、次のような言葉で描かれた情景を解説する。

まず調教師ですが、これは茶目っ気のある、話の大きな単純な大男ですが、彼は「彼が知る中では」最も深遠な観念も、聴衆の知的能力から得たにすぎないにも関わらず、戦いなれた野生動物を支配していると思っていて、それを自慢しているのです！ 傷病兵は、ボアを降参させるにはサーベルで何度斬りつければ良いか、値踏みし考えています。靴屋の小僧は、木戸賃を払わずに忍び込んだ者ですが、一番良い場所を占拠して、蛇もひっくるめた調教師には、彼が払わなかった入場券ほどの価値もない、と判定しているのは明らかです。こうしたことを、あますことなく叙述しきることはできませんので、絵に描かれたものを見なければなりません。的を得ているのは、雨傘を持った学校の王様「教師」でしょう。「自然界の標本」、つまり蛇を目の前にして、彼はパンフレットを精読することを好んでいます。つまり生粋の銜学者です。百姓女は、ペリカンを怖がる子供をかばってい

*専修大学経済学部兼任講師

ますが、子供のブレーツェル [パンの一種] を狙う、恐ろしいくちばしに立ち向かう勇気は彼女にもありません¹⁾。

画布上の群像は、現実の見世物小屋で画家が目にした人々ではなく、彼が戯画化に近いステレオタイプにまとめあげたものだろう。この絵が掲載された『ライブチヒ絵入り新聞』は、主に中産階層の家庭で読まれた雑誌である。同紙を手にする者に比べると、画中の調教師や兵士、農婦はもちろん、風采のあがらない学校教師も、教養や教育、社会的地位において劣る者たちだろう。そのような人々の素朴さや粗野さを、ほほえましくも笑いをさそうものとして描く絵からは、当時の中産階層の人間が、メナジェリー²⁾とそこに集う人々にどのようなまなざしを向けていたのかを見てとることができる。



「メナジェリー」

出典：“Gemälde von Paul Meyerheim in Berlin,” *Illustrirte Zeitung*, Nr. 1181, 17. Feb. 1866, S. 111-4.

マイヤーハイムがこの絵を描いた1860年代は、エキゾチックな野生動物の持つ価値と意味が大きな転換をむかえた時代だった。この時期、ヨーロッパ各地の都市で、次々と動物園が開園した。ドイツ語圏でも、1844年に開園したベルリン動物園、1858年に開園したフランクフルト動物園を皮切りに、1860年代から70年代にかけて、ケルンやドレスデン、ハノーバーといった都市が次々と動物園を持つようになり、気候の良い季節の休日のための行楽先として、動物園は中産階層の日常生活の一角を占めるようになった³⁾。動物園の入園料は中産階層以上の人々の収入を基準に設定され、多くの場合、労働者には高価なものだった⁴⁾。それでも、町中にそうした異国の珍しい動物を常に見物することができる施設が登場したことで、シマウマやサイ、カバといったエキゾチックな野生動物に与えられる意味付けは徐々に変化しつつあった。それまでは、本や雑誌の挿絵が博物館の剥製として、または町を年に数度訪れるメナジェリーで出会えるだけの存在だったものが、いつでも手軽にその姿を目にすることができるものへと変わっていったのである。メナジェリーを、素朴で無教養な民衆の粗野な娯楽として描くマイヤーハイムの絵の背後には、ひとつにはこのような、異国の野生動物の稀少性が相対的に低下しつつある状況があったと言えるだろう。

もうひとつは、動物園の確立にともなうメナジェリーの周縁化である。歴史研究の中でメナジェリーが取り上げられる時、それは近代的動物園の前史として語られることが多い。言い換えれば、都市に近代的な動物園が登場し、野生動物を観賞する場として確立してゆく課程で、時代遅れのものとして徐々に人気を失い、やがて消えていった存在として、メナジェリーは研究史の中で位置付けられているのである⁵⁾。こうした歴史的变化の中におけるメナジェリーの位置付けそのもの、つまり動物園の登場とともに衰退した娯楽の一形態だったという点について疑念を呈することは、本稿の目的ではない。それよりはむしろ、メナジェリーそれ自体に与えられ

た評価を見直すことに、本稿の関心はある。

科学史研究者によるメナジェリー分析では、特に次の2点における動物園との差異が強調される。第1に、動物の扱われ方である。動物園では、屋外の広々とした囲いが用意され、公園然とした清潔で美しい環境の中で、より自然に近い状態で動物が飼育されるようになったと評価する一方で、メナジェリーの仮設のテント小屋では、動物は狭く不衛生な檻に閉じ込められ、芸を強要され、生態にそぐわない環境で飼育されたとされる。つまり、動物園では動物はおおむね健康で幸福であったのに対して、メナジェリーでは動物の福祉には配慮されなかったというのである。第2は、自然科学との関連である。動物園の本分が、自然科学的な教養、つまり様々な動物の姿や生態についての知識を人々に広めることにあったのに対して、メナジェリーはあくまで娯楽のための施設であり、見世物として扱われる動物は知識をもたらすものではなかったというのである。本稿では上記2点について、19世紀フランクフルトにおけるメナジェリーを例に具体的に再検討したい。

1. 動物とパフォーマンス

19世紀のフランクフルトには常設の盛り場はなく、メナジェリーをはじめとする見世物小屋が町に姿を現すのは、年に2度、春と秋に市中に立つ大市の時期である。例年、春の大市は復活祭に先立つ四旬節の期間中に開催され、秋の大市は8月15日の聖母昇天の祝日に始まり、9月8日の聖母誕生の祝日に終わるものだった。織物の取引で賑わった18世紀までの時期にくらべると、19世紀にはフランクフルト大市の経済的な重要性は低下し、前世紀には4千から5千人はいたとされる訪問者数も、減少傾向にあった⁶⁾。秋の大市の期日が示すように、市は3週間にわたって開かれたが、商取引の多くは開催期間の前半に集中していた。そのため、見世物小屋が

営業を開始する開催期間後半には、外来の客の多くは帰途についていると、19世紀初頭のフランクフルトの風俗を描いた『フランクフルト諸景』の筆者、アントン・キルヒナーは述べている⁷⁾。つまり、「板切れ集落」の見世物目当てに集まる者の多くは、遠来の商人ではなく、地元フランクフルトと「周囲の住民」だったと彼は言うのである⁸⁾。

蠟人形館やサーカス、そして「異国の動物」や「バンベルクの自然物陳列室」⁹⁾などと銘打たれた見世物小屋の木戸賃は、日雇いの職人にも払える値段だった。上述のキルヒナーによれば、フランクフルトの見世物市で常連だった蠟人形館の入場料は6クロイツァー、舞台が一番良く見える最前列の席でも12クロイツァーだった¹⁰⁾。当時、例えば左官の日給がおおよそ1グルデン6クロイツァー、つまり66クロイツァーだったので¹¹⁾、平均的な労働者にとって見世物小屋の木戸賃が、安価とまでは言えなくとも、十分に手の届く金額だったことがわかる。

不特定多数の群衆が自由に出入りする場だった見世物市について、訪問者数の統計は存在しない。それでも、同時代のフランクフルトに生まれ育った人々の回想からは、春と秋の風物詩である見世物市の到来を地元民が楽しみにしていたことがうかがえる。次の引用はその一例である。

大市の週には町に活気が満ちた。たくさんの見せ物小屋が、大半は閨兵広場、現在のシラー広場に設けられた。幾度かレンツ・サーカス団（一般にはイギリス騎手団と呼ばれていた）が来たが、大きな円い板小屋で広場のほとんどを占めてしまいそうだった。メナジェリー、生きたハトの頭を食いちぎる、野蛮なアシャンティ族（その内一人が元フランクフルト将校のタンブールだったことが判明したことがあったが）のような蛮人たち、太った女に、何年もいた太った少年—不思議なことに彼は年を取らなかった。射的小屋や回転木馬も。夜遅くまでこの広場では荒々しい騒音と咆哮が満ちていた。後にはこの盛り場は、試しに他の広場に、例えばザクセンハウゼンの猿の門広場や、私の記憶ではボルンハイムの原っぱの

ような所まで回された後、ブライテ通りの広いブライヒガルテンに移された¹²⁾。

見世物市が開かれたのは、十分な広さがあり、かつ繁華街に程近く人が集まりやすい場所だった。引用に登場する閔兵広場は、町の目抜き通りであるツァイルの西端から目と鼻の先、市中心部に位置する広場である。同じく猿の門広場は、フランクフルトの旧市街とはメイン川を挟んだ対岸に位置するザクセンハウゼン地区の中心部にある。町の東北にあるボルンハイムの草地や北面のブライヒガルテンは、町を南北に横断する幹線、ブライテ通りを経由して容易におもむくことのできる場所にあった。

メナジェリーが営業したのは、こうした見世物市が形作る、祝祭的空間の雑踏の中でのことだった。そして、市という空間が醸成する非日常的な解放感とあわせてメナジェリー体験の性格を規定したのが、同じ市の中で営業する、その他の雑多な見世物だった。上記の引用にも描かれているように、見世物市で興行する屋台には、「年を取らない少年」や偽物の「蛮人」のように、いかがわしくもセンセーショナルで詐欺と紙一重の見世物も多く含まれていた。このように真偽も定かではない異形のものや眉唾物が立ち並ぶ空間で営業していたことは、メナジェリーの運営方法にも、そこを訪れる観客の抱く期待にも、少なからざる影響を及ぼしていた。言い換えるなら、メナジェリーを訪れる人々は、ただ珍しい動物を見たいという望み以上の欲求を持って、見世物小屋の戸口をくぐったのである。そのことを次の引用で確認してみたい。

いかがわしき一等星といえ、**「獣小屋」**でした。動物いじめで名高いメナジェリーで、その前では口上人が、身の毛もよだつ猛獣の張りばてを棒でたたきながら、安酒薫るドラ声でまくしたてたものです。「さあさあ旦那方いらっしゃいませ！
ただいまエサやりの時間でございます！」 帳場には、お隣のブランコで遊ぶオウムに負けじとけばけばしく着飾った団長夫人がどっしりと鎮座ましまして、爪の間に

黒々と汚れのつまった彼女の汚い指には、宝石屋丸ごと一軒分ほどの数の指輪がはまっているのです。「旦那方」の中には、靴屋の小僧や口をばかんと開けて見とれている農民がたくさんいましたが、中から出て来た見物客から見るとあらわれるのです。ここでも芋粥某氏（Fabian Stambes）がのたまいました。「入るなよ。[中略] こいつあ見ねえと！ 長いすに寝そべるみてえに団長がライオンに乗ってさ、頭を口の中いれるんだぜ！ 信じらんねえ！ そんでよ、でかい蛇を縄かなんかみてえに首にまきつけるんだぜ」 物見高い連中はいそいそと夫人のところで券を買うと、彼女の優雅な手招きに促って真っ赤な木綿カーテンの裏に消えるのです¹³⁾。

ここに登場する「獣小屋」は、19世紀中頃のものである。回想録を執筆した筆者にとって、戸口付近で展開される猥雑な情景とやり取りの方が、小屋の中の珍獣よりも印象に残ったように、メナジェリーの周囲で飛び交う呼び込みの口上や観客の歓声のようなパフォーマンスは、メナジェリー体験において動物そのものと同等に重要な構成要素だった。木戸賃を払う観客の主たる目的は、確かに珍しい動物を見たいという望みだったが、そうした観客の期待は、例えば興行主のどぎついあおり文句やハリボテの動物の恐ろしげな姿、さらには観客の多分に誇張を含む感想で縁取られ、ふくらまされたものだった。言い換えるなら、誇大広告めいた宣伝やけばけばしくも胡乱な見世物にあふれる空間で興行したメナジェリーでは、そうした大袈裟なパフォーマンスによってあおりたてられる、動物の不可思議さや獐犷さに対する懐疑の念や好奇心また、興行の魅力となっていたのである。

娯楽施設としてのメナジェリーの魅力を分析した研究としては、ロビンスのものがあつた。彼女は、スリルと野生の屈服の両方を見たいという観客の欲望を充足させたことが、彼らがメナジェリーに足を運んだ要因だと分析している¹⁴⁾。つまり、頑丈な檻の中に収められ、観客が安心して見物で

きる状態で提示される動物たちは、彼らの間近でうなり声や牙や爪といった獰猛さを披露する一方で、調教師の手にかかるに従順になり、芸を見せた。こうした人と「野生」のやりとりを見たいという欲望を満たす場だったという点に、同時代人にとってのメナジェリー体験の魅力があったとロビンスは言うのである。このロビンスの分析に対して、本稿は基本的に同意する。ただ、どうしても動物をめぐる体験に焦点が当たりがちなメナジェリー訪問の分析だが、人間によるパフォーマンスの介在を軽視してはならないことをここで強調しておきたい。つまり、動物の獰猛さと従順さを見たいという欲望を観客の中に呼び起こし、さらにはそれを充足させる触媒として、興行師や観客によるパフォーマンスは重要な機能を担っていたのである。

パフォーマンスの中でも中心的な位置を占めたのが、動物への餌やりだった。餌付けは、例えばライオンが肉のかたまりを食いちぎる姿や、ゾウが餌欲しさに芸をする様子など、観客が期待する獰猛さと従順さを興行師が動物から引き出してみせ、それを観客が確認する好機であった。餌をやるという行為と、調教師や見張り番によるパフォーマンスが不可分の関係にあったことを示すのが、次の引用である。19世紀中頃にフランクフルトで生まれ育った筆者が、少年時代に夢中になった「メナジェリーごっこ」を回顧した一節である。

暇な昼下がりには、私の兄弟は、彼らの友人のシュパイヤーの手を借りて、たくさんの椅子で檻を作り上げたものでしたが、その中に私たち姉妹が、外来の出演者たちの援軍と一緒に入って、メナジェリーの動物の役をやったものでした。そうすると、2人の興行師が4時のおやつを受け取って来るのです。餌付けの時間が来ると、熊はうなり、ライオンは吠え、象はトランペットのように鼻を鳴らします。餌と一緒に、水もたっぷりと与えられましたが、配給[される水]は果物で出来ていました。その際に運の悪い動物は、より良い上演をするように、見張

り番に棒でつつかれました。大抵、与えられた餌を巡って、激しい喧嘩が始まったものです。「そのサクランボは僕のだったのに、僕の方がずっとつつかれたんだってば」[というふうに]。¹⁵⁾

このようにメナジェリーの動物たちは、ただ餌を与えられ、それに食らいつくのではなく、その際には散々じらされ、小突かれ、それぞれのあり方にふさわしい、つまり観客が期待するような獐猛さや従順さに合致するふるまいをするように仕向けられたのである。そして、動物をつつきまわし、おどして思い通りのふるまいを引き出すというパフォーマンスは、興行をする側の人間の専売特許ではなく、観客もまた野次を飛ばしたり歓声を上げたり、動物を撫でたりステッキや手袋で叩いたり、檻の中に餌やゴミを投げ込むことで、積極的に介入した¹⁶⁾。

1858年8月8日に開園したフランクフルト動物園は、すでに営業中のベルリン動物園や、以降次々と各地に設立される多くの動物園と同様、観客がいたずらに動物に触れたり刺激を与えたりすることを禁じた。例えばステッキで動物がつつかれることを防ぐために、開園当初の数年間、来園者は入口でステッキを預けることが求められたのである¹⁷⁾。また、現存する中でもっとも古い来園者規定では、「動物を追い立てること、ステッキや傘で触れること、物を投げつけること、またその他の何らかの方法で刺激することは厳禁する」¹⁸⁾と明記されていた。このように、人間からの圧力のかからない、ありのままの自然な状態の動物の姿を見せることを動物園が旨としたことをもって、動物園史はメナジェリーと動物園の大きな違いとした。実際、動物園訪問記の大半は、緑豊かで解放的な空間でのびのびと本来の生態をみせる動物に対する感嘆を描く記述で占められる¹⁹⁾。

しかしそうした、いわば動物園側の意図にそう行動様式にのっとったふるまいの記述は、メナジェリー的なふるまいが動物園に持ち込まれなかったことを意味するわけではない。上記のような禁止事項が開園から10年近

く経過しても存在したということは、むしろ違反行為の存在を示唆する。そして、近代的動物園による動物鑑賞の新しい作法の確立が、一筋縄ではゆかなかったことを明確に示すのが、次の引用である。

そこ〔クマの檻〕では私たちは上階の回廊から、固くなったパンに穴をあけて投げ縄状の紐にくくりつけたものをエサにして、囲いの中央にもうけられた、木登り用のがっしりした木をクマに登らせたものです。投げ縄がとび、パンがついた縄の端が木の一番高い枝に巻き付くと、クマが登って来るのです。

今回、クマは登って来ませんでした。というよりもむしろ、クマは檻の鉄柵のすぐそばに座り込み、つまらなさそうに見上げてただけでした。そこでそのクマを鼓舞するために、私のおばあちゃんが階下に派遣されました。〔でも〕クマは座ったところから動こうとしません。私は疑惑にかられました。きっと彼女は言われたようにクマを日傘でつついていないにちがいない。私は階段を駆け下りました。するとそこでは、仁王立ちになったおばあちゃんが、ホォ！だのヤァ！だのといったかけ声とともに、華奢な日傘をふるって、クマの分厚い毛皮を障壁越しに力一杯つついているではありませんか²⁰。

この回想録の書き手であるビンディングは、フランクフルト有数のビール醸造業者の家の生まれであり、文中に登場する「おばあちゃん」はその家の当主夫人である。そのような、町では上流階層に属する女性が、クマを小突いてほしいという孫のおねだりを規則違反だとたしなめるでもなく、躊躇いなしにクマに日傘をくり出している。上記の挿話が示すように、時として中間階層以上の者をも含む観客の手で、動物園の中にメナジェリー的ふるまいが持ち込まれたのである。このように、メナジェリーと動物園の間の動物の扱い方の変化が、研究が描くように円滑に起こったものではないということを、この節の最後に確認しておきたい。

2. 科学とメナジェリー

1858年にフランクフルト動物園が開園するまで、住民が町中で生きた野生動物を見物できる場所は、ほぼメナジェリーに限定された。しかし、自然科学、特にメナジェリーや動物園にとって最も関わりの深い分野である自然誌研究のための施設は、19世紀の前半から市中に存在した。1817年に設立された、ゼンケンベルク自然研究協会（Senckenbergische naturforschende Gesellschaft）である。同協会は、医師・自然誌研究者であるヤコブ・クレツシュマー（Jakob Cretzschmar, 1786-1845）が、自然誌研究に関心を持つ有志を募って設立した結社（Verein）だが、発足から短期間で飛躍的に発展し、1830年代にはヨーロッパでも五指に入る自然誌研究のセンターとなった協会である。ゼンケンベルク協会の設立と発展の経緯については別稿を期したいが、ここで注目したいのは、次に紹介する、同協会設立の契機の一つとなった事件である。

創立期から深く協会の活動に関与していた自然誌家エドゥアルト・リュッペル（Eduard Rüppell, 1794-1884）の回顧録によれば、1817年のフランクフルト大市では、アドリア海産の生きた黒いアザラシが見世物の一つとして人気を博したという。ところが市が終わりに近付いた頃、そのアザラシは病死してしまった。アザラシの飼い主は、その骸を近隣の大学に動物学標本として売却しようと、ギーセン大学とハイデルベルク大学に打診したが、大学側が返答に手間取っているうちに、アザラシの骸は腐敗してしまい、処分せざるをえなくなった。自然誌に関心を持つフランクフルト市民の間から、貴重な標本をむざむざと失ってしまったことを遺憾に思う声があがったことから、こうした損失が繰り返されないことがないように、とゼンケンベルク協会の設立が提唱されたというのである²¹⁾。

アザラシの亡骸が実際に協会設立の直接的契機となったかどうかについ

ては、異論もあるため検討の余地が残るが、上記のエピソードからは、メナジェリーと自然科学の関係について、2つのことが分かる。まず、メナジェリーが所有する動物の中には、大学の動物学コレクションに標本として収めるだけの学術的価値と希少性を持つ動物も含まれていた、ということである。そして、メナジェリーの所有する動物が、一私人として自然誌の研究に従事し、標本を収集する個人コレクターや研究者には容易に手を出せない高嶺の花だった、ということである。死んだアザラシの学術的価値を認める者がいたにも関わらず、買い手として名乗りをあげる者がフランクフルトにいなかったことが、このことを示している。以上の2点から、生きた動物を有するメナジェリーが、当時の自然科学研究にとって、貴重な研究材料の供給源の1つだったということが分かるだろう。

こうした状況がフランクフルトだけに限定されるものではなかったことを、1850年の『ヴェッテンベルク郷土自然研究協会年報』に掲載された論文が示す²²⁾。同論文の著者であるマルテンスという名の自然誌家は、1849年12月から1850年1月にかけてシュトゥットガルトのヴィルヘルム広場で営業した、「マティアス・ヒュントゲンの天敵オムニスムス (Matthias Hüntgen's Omnismus aus erbfeindlichen Thieren)」と銘打ったメナジェリーを都合12回も訪問し、そこで得られた動物の観察結果を詳細に報告しているのである。特に筆者の関心をとらえたのは、動物たちがいかにして本能を抑えるようになったのか、という問題だった。というのも、ヒュントゲンの「オムニスムス」は、オオカミやアライグマ、キツネ、犬や猫、ウサギなどの肉食草食を取り混ぜた哺乳類15匹、そしてハゲタカやワシミミズク、ニワトリ、ガチョウなどの猛禽家禽合わせた鳥類12羽の計27匹を1つの檻で飼育、展示するものだったからである²³⁾。本来は捕食者であるはずのキツネやオオカミの隣で、ニワトリやウサギが我関せずとくつろぐ様子は、筆者を驚嘆させた。そうしてマルテンスは、個々の動物が何を餌として与えられ、どのような調教がほどこされたのかを解明するために、見世物市

に日参したのである。この例からも、メナジェリーが自然誌を研究する者にとって、動物の生態や飼育方法についての貴重な知識を得られる場所であったことが分かる。

自然界の動植物の標本を収集・展示する自然誌博物館と、見世物市にあつて珍奇な動物を観客に披露するメナジェリーは、方や教養人が科学研究と教育に従事する施設、方や民衆の娯楽のための施設と分類される。両者が奉ずる目的は全く異なるものであり、必然的に別種の観衆を相手に異なる社会的な領域で活動した、とするのが、現在も科学史研究に根強く残る見解である²⁴⁾。こうした二項対立的な分類は、当時博物館側が打ち出した建前に端を発し、科学史研究に引き継がれたものである。例えば1822年に開館したゼンケンベルク協会の自然誌博物館は、無料で一般に公開されたが、その開館時間は水曜日の午後2時から4時と金曜日の午前11時から午後2時の間に限定された²⁵⁾。当時の博物館は展示スペースと研究スペースが分かれていなかったため、動物を見物に訪れる来館者の存在が、博物館で研究や調査に従事する協会の作業の邪魔になってしまうからである²⁶⁾。自然誌研究を目的とする訪問者に対しては、同協会は柔軟に対応した。例えば1835年に自然誌家アレクサンダー・フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt, 1769-1859) が同博物館を訪問した際には、通常は閉館している時間にもかかわらず訪問を許可し、協会の1人が付き従って館内を案内しているのである²⁷⁾。

しかしこうした来館者制限が、実は博物館とメナジェリーを混同する観衆を警戒する協会が講じた予防措置でもあったことを示すのが、日曜日に博物館を一般公開することを求める声に対して、雑誌に寄稿した記事で否と回答した、次の協会の言葉である。

しかしその結果〔土日に博物館を公開した結果〕はというと、これらの日に仕事がない、公衆の最下層の部分が私たちの博物館をランデブーの場所に出し、

大人数でホールを埋めてはガラスを割り、ありとあらゆる良からぬ行為にふけたのだ。—このような結末は避けようがない²⁸⁾。

記事を書いたのは、ゼンケンベルク協会設立の中心人物だった、医師クレッチュマーである。彼は、博物館が開館した当初は週末も一般に公開されていたことに触れ、上記のような観衆の狼藉から土日の開館は不可能と相なった、と説明しているのである。

ところが、このような博物館側の表向きの姿勢とは裏腹に、自然誌研究とメナジェリーの間に引かれた一線は、現実にはかなりあいまいなものであり、博物館側の人間が踏み越えることもしばしばだった。上記の記事を書いたクレッチュマー自身が、その数年前に起こした事件がその好例である。彼は、フランクフルトを訪れたメナジェリーの持ち主から象を買って、博物館の敷地内で見世物にしようとしたのである。

初期の頃、[博物館に隣接する]解剖学研究所の中庭では、いつも大型の動物が何頭か飼われていて、彼[クレッチュマー]はその観察に随分と取り組んでいたものでしたが、彼は動物園を作るという計画を真剣に考えていました。[中略]彼が利己的な策士にだまされ、甘言にのせられて象を買ってしまった時も、このあきらめきれない計画のことを考えていました。その象は、表向きは調教されていない野生の状態のため、ここから動かすことが出来ないとのことでしたが、実のところは持ち主の借金のためでした。これが新しいメナジェエリーの中核になり、見物客から入場料を得ることで維持と拡充をするための手段になるはずでした。[中略]協会が[中略]この計画に加わらず、協会の能力と活動を分散させなかったのは正しいことでした。[中略]しかしこの反対は、クレッチュマーの炎のような反抗心に火を付けてしまい、[中略]その結果として彼は随分不愉快な目や悪意の陰口を受け、その上非常に大きい金額を失ったのです²⁹⁾。

クレッチュマーが象を購入した動機が、動物の生態を直に観察するための動物園を作りたいというものだった点では、彼の計画は見世物市のメナジェリーとは異なっている。とはいえ、木戸賃と引き換えに動物を見物させるという点で、彼の「メナジェリー」は見世物市のそれと何ら相違しない。彼の計画は結果として潰え、象は売り払われることになったが、このようなゼンケンベルク協会側の一貫性に欠ける行動もまた、観衆が博物館とメナジェリーを同じ次元の施設と見る一因となったと言えるだろう。

おわりに

近代的な動物園や博物館の成立に脚光をあてる科学史の叙述の中では、前時代的な存在として周縁化されがちなメナジェリーであるが、本稿での考察が示唆するように、そこでつちかわれた行動様式や知識は、同時代の動物園や自然科学研究とは無縁のものとは必ずしも言い切ることのできないものだった。

興行師のあおり文句や観客の歓声、調教師や観客による動物への直接的な働きかけといったパフォーマンスが介在することで成り立ったメナジェリー体験は、見世物市という異形のものやまがい物があふれる空間で営業する施設ならではの特性を示す。大袈裟な口上や宣伝でかき立てられた好奇心や疑念に背を押されてメナジェリーの小屋に入った観客は、動物から獐猛さや従順さを自在に引き出す調教師の手並みに感嘆したり、時として自分自身の手で動物をつつき、さわり、餌を与えてみたりすることで、動物の「野生」を体感した。メナジェリーという場で生まれた、こうしたパフォーマンスを介した動物鑑賞の様式は、メナジェリーにおける動物の飼育環境とともに、動物を不用意に虐げ、苦しめるものとして否定的な評価を受けてきた。こうしたメナジェリー的な動物鑑賞の仕方の倫理的な評価は、本稿の射程からは外れるので控える。しかし、動物を直接に触り刺激

することを厳禁する動物園が確立した後も、メナジェリー的なふるまいがすんなりと過去のものにはならなかったことは強調しておきたい。必ずしも動物園側が意図したようには、観客は2つの施設の間の線引きを遵守しなかったのである。つまり、動物園の確立によっても、動物鑑賞からパフォーマンスが払拭されたわけではなかったのである。

差異化の努力が観衆の行動によって覆された、という点では、自然科学研究とメナジェリーの関係も同じである。本稿の後半で検証したように、メナジェリーは必ずしも研究史で描かれるように自然科学研究と無縁ではなかった。営利を追求する娯楽施設であったことは確かでも、生きた動物を擁するメナジェリーは、希少な研究標本の供給源として、また飼育方法や生態に関する貴重な情報源として、自然誌の研究に従事する者にとって無視しえない知的資源だった。しかし自然科学とメナジェリーの関係は、単純な協力者同士のそれではなく、矛盾に満ちたものだった。一方では、自然誌研究者たちは、娯楽のための営利施設であるメナジェリーと科学研究のための施設である博物館を峻別し、両者を同列にみなし博物館に娯楽を求めてやってくる観衆に神経を尖らせた。しかし他方では、そうした建前とは裏腹に、メナジェリーから動物を購入して木戸賃収入を得ようとした自然誌研究者が存在したように、メナジェリーと博物館の間の距離は、科学史の叙述に描かれるものよりもはるかに近いものだったのである。その点では、メナジェリーとの差異を強調する博物館側の言よりも、博物館に珍しい動物を期待して来館した人々の行動の方が、当時の両者の関係をより正確にとらえているとさえ言えるだろう。

最後に本稿の考察から見えて来る今後の課題についても触れておきたい。ここでは、メナジェリーという娯楽施設と自然科学、そして自然科学に関わる施設の関係について考察したが、こうした娯楽と科学の接点に位置した施設は、何もメナジェリーにとどまるものではない。例をあげるなら、パノラマ館や同じく見世物市の常連だったサーカスのような施設もまた、

検証する必要があるだろう。例えば「パノプティコン」と呼ばれる蠟人形館と19世紀末の人類学や民族学研究の関連性など、すでに一定の成果をあげている分野もあることから³⁰⁾、上記のような施設を検証することで、科学史をはじめとする歴史研究に対して、新しい視角を提供できる可能性があることを指摘することで、本稿のおわりに変えたい。

注

- 1) Die Menagerie. “Gemälde von Paul Meyerheim in Berlin,” *Illustrirte Zeitung*, Nr. 1181, 17. Feb. 1866, S. 111-4.
- 2) 「メナジェリー」とよばれる施設には、王侯貴族が所有する動物コレクションを指す場合と、町中や見世物市などで動物を見世物にする娯楽施設を指す場合の2通りがある。本稿では後者の意味でメナジェリーという用語を使用する。なお、メナジェリーについては、伊東剛史『『幸福な家族』の肖像—19世紀ロンドンの『動物史』、『三田史学』第77巻第2・3号149-176頁も参照。
- 3) Annelore Rieke-Müller, Lothar Dittrich, *Der Löwe brüllt nebenan. Die Gründung Zoologischer Gärten im deutschsprachigen Raum 1833-1869*, Köln, 1998, S. 1-10.
- 4) 例えばフランクフルト動物園の入園料は、1858年の開園当初は大人が24クロイツァー、子供が12クロイツァーだったが、1860年からは大人は30クロイツァーに値上げされた。これは当時の日雇い労働者の日給の約半分に相当する。労働者の賃金については第1節及び脚注11番を参照。D. F. Weinland, “Zur Geschichte unseres Zoologischen Gartens,” *Der Zoologische Garten*, Nr. 1, 1. Okt. 1859, S. 19; Jochen Dollwet, Thomas Weichel (Hrsg.), *Das Tagebuch des Friedrich Ludwig Burk. Aufzeichnungen eines Wiesbadener Bürgers und Bauers 1806-1866*, Wiesbaden, 1994, S. 194-5.
- 5) R. J. Hoage, William A. Deiss (eds.), *New Worlds, New Animals. From Menagerie to Zoological Park in the Nineteenth Century*, Baltimore/London, 1996; Rieke-Müller, Lothar Dittrich, *Der Löwe*; Gerhard Heindl, “Kaiserliche Menagerie und zoologischer Garten. Der Tiergarten Schönbrunn im 19. und frühen 20. Jahrhundert,” Mitchell G. Ash, Lothar Dittrich (Hrsg.), *Menagerie des Kaisers-Zoo der Wiener. 250 Jahre Tiergarten Schönbrunn*, Wien, 2002, S. 117-157; Nigel Rothfels, *Savages and Beasts: The Birth of the Modern Zoo*, Baltimore/London, 2002等を参照。
- 6) Ralf Roth, *Stadt und Bürgertum in Frankfurt am Main: ein besonderer Weg von der ständischen zur modernen Bürgergesellschaft, 1760-1914*, München, 1996, S. 53-4.
- 7) Kirchner, *Ansichten*, Bd.2, S.42; 小倉欣一, 大澤武男『都市フランクフルトの歴史? カール大帝から1200年』, 中央公論社, 1994年, 55-6頁。
- 8) Anton Kirchner, *Ansichten von Frankfurt am Main, der umliegenden Gegend und den*

- benachbarten Heilquellen*, Frankfurt am Main, 1818, Bd. 2, S. 42.
- 9) Kirchner, *Ansichten*, Bd. 2, S. 36.
- 10) Kirchner, *Ansichten*, Bd. 2, S. 37.
- 11) 1 グルデンは60クロイツァーである。左官の日給は1858年当時、フランクフルト近隣の都市ヴィースパーデンのものである。Dollwet, *Das Tagebuch*, S. 194-5.
- 12) Christian Demuth, Frankfurt am Main um die Wende der 50er und 60er Jahre des vorigen Jahrhunderts. Erinnerungen eines alten Mannes, Abschrift, Herbst 1928. Institut für Stadtgeschichte Frankfurt am Main, S5/104, S5/105, S. 3-4.
- 13) Johann Jacob Fries, *Humoristische Momoiren eines alten Frankfurters*, Frankfurt am Main, 1897.
- 14) Louise E. Robbins, *Elephant Slaves and Pampered Parrots: Exotic Animals in Eighteenth-Century Paris*, Baltimore/London, 2002, p. 69.
- 15) Georg Wilhelm Pietsch, Lebenserinnerungen, Winter 1914, Institut für Stadtgeschichte Frankfurt am Main, S5/161.
- 16) 例えば Georg von Martens, “Die Menagerien in Stuttgart,” *Jahreshefte des Vereins für vaterländische Naturkunde in Württemberg*, sechster Jahrgang, 1850, S. 103-4を参照。
- 17) 例えば B., “Neuer Fremdenführer,” *Frankfurter Latern*, Nr. 30/31, 17. Aug. 1861, S. 119.
- 18) Verwaltung der Zoologischen Gesellschaft, *Reglement für den Besuch des Zoologischen Gartens. Bestimmung über die Eintritts-Berechtigung*, Frankfurt am Main, 1877. フランクフルト動物園の文書庫は、第二次世界大戦で被災し、大半の文書が焼失している。現在所蔵されるものは、戦後寄贈された断片的な文書が中心である。
- 19) 例えば “Der zoologische Garten [Frankfurt],” *Frankfurter Konversationsblatt. Belletristische Beilage zur Postzeitung*, Nr. 124, 16. Mai, 1858, S. 463-4を参照。
- 20) Rudolf G. Binding, *Erlebtes Leben*, Frankfurt am Main, 1928, S. 42-3.
- 21) Eduard Rüppell, “Autobiographisches Bruchstück,” in: Robert Mertens (Hrsg.), *Eduard Rüppell. Leben und Werke eines Forschungsreisenden*, Frankfurt am Main, 1949, S. 226-7.
- 22) Martens, “Die Menagerien in Stuttgart,” S. 85-123.
- 23) この種のメナジェリーはヒュントゲンのものに限られたわけではなく、一類型として複数存在したとも考えられる。伊東『『幸福な家族』の肖像』を参照。
- 24) 例えば Susanne Köstering, *Natur zum anschauen. Das Naturkundemuseum des deutschen Kaiserreichs 1871-1914*, Köln/Weimar/Wien, 2003, S. 37-9.
- 25) *Die freie Stadt Frankfurt am Main nebst ihren Umgebungen. Ein Wegweiser für Fremde und Einheimische*, Frankfurt am Main, 1843 (Neudruck mit einem Nachwort von Alfred Estermann, Frankfurt am Main, 1991), S. 65.
- 26) Sophie Forgan, “The Architecture of Display: Museums, Universities and Objects in

- Nineteenth-Century Britain,” *History of Science*, vol. 32, 1994, pp. 139-162; Köstering, *Natur zum anschauen* 等を参照。
- 27) フンボルトのような有名人に限らず，研究者が同博物館を訪問する際には，事前に訪問を予告すると，開館時間の内外に関わらず訪問が許可され，協会員が案内役として同行する場合が多かった。Waldemar Kramer, *Chronik der Senckenbergischen Naturforschenden Gesellschaft 1817-1966*, Frankfurt am Main, 1967, S. 259.
- 28) Cretzschmar, “Senckenbergisches naturgeschichtliches Museum,” *Frankfurter Jahrbücher*, Nr. 9, Bd. 10, 11. Aug. 1837, S. 68-9.
- 29) J. M. Mappes, *Zum Andenken an Dr. Philpp Jakob Cretzschmar*, Frankfurt am Main, ca.1846, S. 9.
- 30) H. Glenn Penny, *Objects of Culture: Ethnology and Ethnographic Museums in Imperial Germany*, Chapel Hill, 2007などを参照。